

韓国政治における金鍾泌の役割

—三金時代 (1988～2003)の分析—

立命館大学大学院国際関係研究科
 国際関係学専攻博士課程後期課程
 イコマ トモカズ
 生駒 智一

【全体要旨】

韓国は 1988 年に民主化された。民主化後に成立した盧泰愚(1988-1993)、金泳三(1993-1998)、金大中(1998-2003)の三政権におよぶ 15 年間を一般に三金時代と呼ぶ。これは、金泳三、金大中の両大統領に金鍾泌を加えた“3”人の“金”氏がこの当時の韓国政治の中樞を担っていたからである。

三金時代を通じて、韓国の立法府である国会では、各大統領と、金鍾泌の 4 氏を領袖とする 4 つの勢力が議席の大半を占めていた。また、各勢力の規模は期間を通してほぼ一定であり、概ね盧泰愚派 4 割、金大中派 3 割、金泳三派 2 割、金鍾泌派 1 割であった。単独で過半数を確保した勢力は存在しなかったため、各政権は連合政権となった。

金鍾泌派は 1 割程度の議席しか保有していない弱小勢力であったが、三政権すべてにおいて政権与党入りし、領袖の金鍾泌は盧泰愚政権では与党ナンバー3 の最高委員、金泳三政権では与党ナンバー2 の党代表、金大中政権では行政府ナンバー2 の国務総理という要職を歴任した。この、弱小勢力の領袖に過ぎない金鍾泌が、政権の中樞に居続けることができた要因を解き明かすことが本稿における目的である。

	連合構成	金鍾泌の役職
盧泰愚政権	盧泰愚派+金泳三派+ 金鍾泌派	党最高委員 (与党ナンバー3)
金泳三政権	金泳三派+盧泰愚派 (親金泳三系) + 金鍾泌派	党代表 (与党ナンバー2)
金大中政権	金大中派+盧泰愚派 (反金泳三系) + 金鍾泌派	国務総理 (行政府ナンバー2)

この結果、長年に渡る三金の複雑な人間関係があり、それに基づいた「接着剤」という役割が金鍾泌にあったことを解き明かした。「接着剤」とは、90 年代に日本で成立した村山内閣において新党さきがけ (武村正義) に、同じく小渕内閣において自由党 (小沢一郎) に対して用いられた言葉である。両党は中小政党に過ぎなかったが、両内閣が成立する上で欠かせない役割を果たした。金鍾泌 (派) にも同じ役割があったということである。

金鍾泌が「接着剤」の役割を果たさなければ、国会運営は安定しなかったが、これは三金時代が民主化を果たした直後の時期ということに鑑みれば、韓国の民主主義の危機を招いた可能性があった。また、金鍾泌がこの役割を果たしたからこそ、民主化勢力の金泳三も金大中も大統領になることができた。したがって、韓国の民主化の定着という観点からも金鍾泌が果たした役割の価値は非常に大きなものがあったと言える。

従来、金鍾泌はその名こそ広く知られているが、要職を歴任しながらもついに大統領に成れなかったことから、「永遠のナンバー2」という否定的な「評価」に終始し、それを肯定的にとらえ、その要因を「分析」というレベルにまで昇華されることはなかった。本稿はその金鍾泌に焦点を当てた分析を行うことで、従来明らかにされていなかった、韓国政治の深淵を解き明かした。

【目的と章構成】

1988年～2003年の三金時代を通じて韓国の国会では、概ね盧泰愚派 4割、金大中派 3割、金泳三派 2割、金鍾泌派 1割という勢力構成となっていた。このうち金鍾泌を除いた各派の領袖は当該期間中にいずれも大統領になっている。しかし、単独で過半数を確保した勢力は存在しなかったため、各政権は連合政権となった。

金鍾泌派は1割程度の議席しか保有していない弱小勢力であったが、三政権すべてにおいて政権与党入りし、金鍾泌は盧泰愚政権では与党ナンバー3の最高委員、金泳三政権では与党ナンバー2の党代表、金大中政権では行政府ナンバー2の国務総理という要職を歴任した。

金鍾泌は韓国政治において非常に著名な人物であり、その名を知らない人はいないと言っても過言ではない。そうであるにもかかわらず、特に三金時代において金鍾泌はほとんど着目されてこなかった。

その理由の一つは金鍾泌派が弱小勢力に過ぎなかったからである。しかし、それよりも大きな理由は、要職、特にナンバー2の職を幾度となく務めながら、ついにナンバー1である大統領に成っていないからである。韓国においては、ナンバー2どまりというのは、ナンバー1に成れなかった「頭を垂れた、不足した人物」であるというように否定的に捉えられてきたからである。

韓国政界には、旧軍部、新軍部、民主党旧派、民主党新派という4つの勢力の系譜が存在した。三金時代における4勢力はそれぞれの流れをくむものである（金鍾泌派←旧軍部、盧泰愚派←新軍部、金泳三派←民主党旧派、金大中派←民主党新派）。すなわち、金鍾泌は三金時代において、自勢力以外のすべての勢力出身大統領による政権に参画し、且つ常に要職を任されていたことになる。これは自勢力を率いて大統領になることよりも困難な事柄であり、大統領になった他氏よりも着目する必要があると言える。

このように、弱小勢力の領袖でありながら、金鍾泌が政権の中核に居続けることを可能とした要因を解き明かすことが本稿における目的である。

章構成は、以下のとおりである。

序章

第一章 分析モデルの検討

第一節 連合政権理論モデル

- 第一項 サイズによる連合理論モデル
- 第二項 サイズによる連合理論モデルの検証
- 第三項 イデオロギーによる連合モデル
- 第四項 イデオロギーによる連合モデルの検証

第二節 2.5 政党制モデル

- 第一項 政党システム
- 第二項 2.5 政党制モデル
- 第三項 2.5 政党制モデルの検証

第三節 かなめの党モデル

第四節 地域連合モデル

- 第一項 朝鮮八道
- 第二項 嶺南と湖南
- 第三項 地域主義
- 第四項 地域主義のはじまりと定着
- 第五項 地域連合モデルの検証

第五節 接着剤モデル

- 第一項 政治学用語としての「接着剤」
- 第二項 日本政治における「接着剤」の実例 1. 自社さ連合
- 第三項 日本政治における「接着剤」の実例 2. 自自公連合
- 第四項 日本政治における「接着剤」の実例 3. 立憲民主党と希望の党
- 第五項 韓国政治における「接着剤」
- 第六項 接着剤モデルの検証

第二章 三金時代に至る道

第一節 三金と三金時代

- 第一項 三金
- 第二項 三金時代
- 第三項 三金の出自

第二節 大韓民国政府樹立まで

- 第三節 李承晩政権（第一共和国）期
- 第四節 張勉政権（第二共和国）期
- 第五節 朴正熙政権（第三、四共和国）期
- 第六節 全斗煥政権（第五共和国）期

第七節 小結

第三章 三党合同（盧泰愚、金泳三政権期）

第一節 盧泰愚政権の成立

第二節 連合を巡る駆け引き

第三節 ゴルフ会談

第四節 三派連合と金泳三

第五節 金泳三大統領候補選出と金鍾泌代表最高委員就任

第六節 金泳三政権

第七節 金鍾泌の下野

第四章 DJT 連合（金大中政権期）

第一節 DJT 連合の成立

第二節 DJT 連合政権

第三節 第 16 代総選挙

第四節 DJT 連合の終焉

第五節 連合解消後の金鍾泌

終章

あとがき

【各章要約】

第一章

弱小勢力でありながら金鍾泌派が連合に加わることが出来た要因を探るために、第一章において様々なモデルによる説明を試みた。

まず最初に導入として、一般的な連合政権理論による説明を試みた。続いて、少数勢力が連合に加わるというモデルとして、2.5 政党制モデルとかなめの党モデルによる説明を試みた。

ここまでの分析モデルは議院内閣制を採るヨーロッパ諸国の分析が基となっている。東アジアに位置する上に大統領制を採る韓国に適用できなくとも不思議ではない。金鍾泌派が連合に加わることが出来た要因は韓国特有の要素による可能性が否定できない。そこで、次に現代韓国政治を規定する最も大きな要素である「地域主義」という概念を用いて分析を試みた。

最後に、本稿で用いた分析モデルである「接着剤モデル」の紹介を行った。しかしながら、「接着剤」という言葉自体政治学においてしっかりと定義づけられたものではない。そのため、「接着剤モデル」が実際に現れた日本における「自社さ連合」および「自自公連合」を見つめ直しながら、「接着剤モデル」がどのようなモデルなのかの確認を行った。

第二章

各政治勢力間に働く「相互作用」は「接着剤モデル」では各勢力間で長年にわたって培われてきた関係性に大きく依存することが第一章での検証から分かった。そして、この時代の韓国の政治勢力というものは領袖を頂点とする個人的な勢力という側面が強かった。このため、領袖の個人的な人間関係が強く影響したと推測できる。そこで、三金時代の中心人物である、金大中、金泳三と金鍾泌のいわゆる「三金」の人間関係について確認を行ったのが第二章である。

韓国で重視された「人間関係ネットワーク」において重要な要素となったのは血縁、地縁、学縁である。最初にそれらの要素から3人の人間関係の確認を試みた。

次に3人が生まれてから三金時代を迎えるまでの各時代において、3人の間にどのようなドラマが展開されて行ったのかを時代ごとに確認を行った。

第三章

分析の対象期間において、連合は二度形成されている。一度目は盧泰愚政権と金泳三政権期に成立した「三党合同」である。これを第三章で分析した。「三党合同」が成立するまで金鍾泌派、盧泰愚派、金大中派、金泳三派の4派はすべて個別の政党を構えていたため、連合の組み合わせ数は最も多かった。実際、各勢力間で様々な駆け引きがあった。その駆け引きを経て連合が成立する過程を分析した。

この連合は金泳三政権でもそのまま引き継がれた。そのまま続いていくかとも思われたが、金鍾泌が離脱したことによって、連合はあっけなく終焉を迎えた。この瓦解に至る過程も本章で分析を行った。

第四章

第四章では分析対象期間中で最後に成立した、金大中政権におけるDJT連合についての分析を行った。金鍾泌は金大中と連合を組むことによって再び政治の中心に舞い戻ってきた。しかし、最終的に、金鍾泌はこの時も自ら連合を離脱し、連合を瓦解させた。このときは金大中派の勢力の小ささ故に、金鍾泌への依存度は高かった。このため、金鍾泌の発言力は大きく、金鍾泌の政治権力は期間中でもっとも大きくなったように思われた。にもかかわらず、金鍾泌が自らその立場を放棄するに至った過程を分析した。

【まとめ（結果・考察）】

本稿での分析の結果、弱小勢力の領袖でありながら金鍾泌が政権の中枢に居続けることができたのは、連合形成に当たって不可欠であり且つ他人では担えない、「接着剤」という役割が彼にあったからだ分かった。

共に民主化勢力出身であった金大中と金泳三は、2人で手を携えれば政権の獲得が可能であった。しかし、長きにわたる2人の人間関係がそれを不可能とした。それどころか、軍事勢力そっちのけで、互いをライバルとした熾烈な大統領レースを繰り広げる有様であった。

2人が大統領レースで勝利を収めるためには、国会での勢力図からいって盧泰愚派の協力が不可欠であった。しかし、盧泰愚と彼らとは直前の全斗煥政権期において、弾圧を行った側と行われた側という立場にあり、容易に手を携えられる関係ではなかった。そこで登場するのが双方と関係の深い金鍾泌であった。金鍾泌は盧泰愚と同じく軍人出身である一方、金大中、金泳三とは共にソウルの春で民主化運動を行った間柄にあった。このため、彼らは金鍾泌に「接着剤」として間に入ってもらうことで、盧泰愚派との連合を実現させ、大統領の地位を手に入れることに成功した。そして、金鍾泌は「接着剤」という役割を果たすことで、三金時代の3政権全てに参画し、要職を獲得したのである。

金大中、金泳三両氏が所属する民主党新派、民主党旧派の争いというものは、この時に始まったものではなかった。1度目は李承晩退陣後に成立した1960年の民主党政権内部における勢力争いであった。そこを朴正熙と金鍾泌に突かれ、両氏による軍事クーデターは成功し、民主党政権は瓦解した。2度目は1980年のソウルの春の時である。朴正熙が暗殺されると、韓国には民主化の気運が高まった。しかし、両派の代表格となっていた金大中と金泳三の対立でその運動は一本化しなかった。そこを全斗煥と盧泰愚に突かれ、全斗煥による軍事独裁政権が成立した。

3度目が1987年の大統領選挙であった。国民からの人気がなかった全斗煥は後継者の盧泰愚に民主化宣言を出させ、次期大統領選挙を直接選挙で行うことを発表させた。この時も、金大中と金泳三が協力していれば盧泰愚に勝利し、民主化勢力が政権を獲得することも可能であった。しかし、両氏の対立で民主化勢力の票は割れ、漁夫の利を得た盧泰愚に大統領の座を持って行かれてしまったのである。

3度あったことは4度目もありえる。盧泰愚の次の大統領も盧泰愚派から選出される可能性は十二分にあった。そうなると、民主化時代であるにもかかわらず、軍事勢力から大統領が出続けるという、民主化の形骸化が起こる危険性があった。しかし、盧泰愚の後任大統領の座を射止めたのは民主化勢力出身の金泳三であった。これは金鍾泌からの支援なくしては実現しなかったものである。

金泳三の大統領就任によって、名実ともに韓国には民主化時代が到来した。確かに金泳三は民主化勢力出身である。しかし、所属政党は盧泰愚と同じであり、政権を構成する勢力が交代したわけではなかった。金大中の大統領就任によって初めて平和的に勢力の交代が果たされたが、これを実現させたのも「接着剤」としての役割を果たした金鍾泌であった。

このように韓国の政治史というものは、民主党新派、民主党旧派の対立を軍事勢力に突かれるということを繰り返してきた。これに終止符を打ち、韓国に民主化を定着させたのは、金鍾泌が「接着剤」としての役割を果たし、両派以外の組み合わせによる連合を実現させたからである。こうした点を考えると、韓国の政治史において金鍾泌はもっと高く評価されるべきである。

金泳三、金大中両氏の要請で「接着剤」役となった金鍾泌であるが、受動的な姿勢に終始し、いいところが無いようにも見える。しかし、支持する勢力の規模が1割程度では、単独

与党はもちろんのこと、第一野党になることも困難であると言わざるを得ず、議会運営に極めて限定的な影響力しか及ぼすことはできない。それが「接着剤」としての役割を果たすことによって政権入りし、要職を手に入れたという事実はそれだけで十分な「果実」と言える。

また、韓国の国会には20人以上の議員が所属する団体は「院内交渉団体」と呼ばれ、様々な優遇措置があった。韓国国会の議員定数は三金時代の大半の期間において299人であったため、1割前後の勢力しか持っていない金鍾泌派は、常にこの「院内交渉団体」の資格喪失の危険性と戦っていた。実際、1992年の第14代総選挙と2000年の第16代総選挙では金鍾泌派は大敗を喫し、この20人の大台を割り込んでしまっている。しかし、どちらの時も連合の力によって同団体の資格喪失を免れることができた。これも少数勢力に過ぎない金鍾泌派にとっては十分大きな「果実」と言える。

そして、最終的には反故にされたとは言え、本心としては最初から全く乗り気でなかった金泳三、金大中に議院内閣制への改憲を飲ませることが出来たのも「接着剤」としての役割があつてのことである。連合を組む際には金泳三、金大中両氏からの要請という受動的な姿勢ではあつたものの、連合を瓦解させたのはどちらも金鍾泌であり、こちらでは能動性が見られる。

さらに言うと、受動的な姿勢を採ることが出来たというのは、金鍾泌という政治家の特徴だと評価することが可能である。金鍾泌は実力のある政治家であった。それだけに何度も迫害のターゲットとされ、幾度となく政治の中枢から追いやられた。しかし、毎回そこから不死鳥のごとく蘇ってくるのである。韓国の政治家たちは皆大統領になることを夢見、そこに能動的に一直線に突き進んで行くものばかりであった。そして、そういった政治家たちの多くは一度レースから脱落すると、再起することはできなかつた。猪突猛進に突き進むばかりでなく、その時々を冷静に分析し、緩急剛柔をうまく使い分けることができたのが、生き馬の目を抜くような韓国の政界の中にあつて、金鍾泌が半世紀にわたって生き延び続けることを可能とした「処世術」なのである。

「接着剤モデル」による連合というものは、容易に成立するものではない。それは裏を返せば「接着剤モデル」による連合が求められる状況というのは、あまり良い連合の選択肢が残されていない状況であると言える。したがって、「接着剤モデル」による連合が成立しなかつた場合、不安定な政治運営を余儀なくされ、民主主義が定着していない場合、その危機に直面する可能性も高まることとなる。「接着剤モデル」による連合は、そのような政治的危機に陥る一歩手前で立ち止まることを可能とする選択肢なのである。

本稿の分析に当たっては、ヨーロッパ諸国の分析を基とした政治学における連合モデルだけでなく、血縁や地縁など個人的な人間関係が重視される韓国の政治文化に基づいた要素も多く対象とした。そしてそれらの多くは韓国固有のものではなく、東アジアやより広くアジア全体にも少なからず見受けられるものである。「接着剤モデル」も個人的な人間関係の上に成り立つモデルであり、韓国と同じ東アジアに位置する隣国・日本で見出されたものである。したがって、「接着剤モデル」には地域性が影響を与えている可能性もある。

また、日韓における2つずつの「接着剤モデル」による連合が出現したのは、いずれも90年代のことである。日韓共にその後も「接着剤モデル」による連合が期待される場面もあったがいずれも成立には至っていない。このようなことから「接着剤モデル」には時代性も影響を与えている可能性がある。これらの検討は今後の課題である。

【主な参考文献】

《公的資料》

『第 13 代大統領選挙総覧』中央選挙管理委員会、1988 年。

『第 15 代大統領選挙総覧』中央選挙管理委員会、1997 年。

『第 13 代国会議員選挙総覧』中央選挙管理委員会、1988 年。

《新聞・雑誌》

朝日新聞【日本語】

読売新聞【日本語】

雲庭 各巻（雲庭財団）【韓国語】

韓国日報【韓国語】

国民日報【韓国語】

世界日報【韓国語】

ソウル新聞【韓国語】

中央日報【韓国語】

朝鮮日報【韓国語】

東亜日報【韓国語】

ハンギョレ新聞【韓国語】

《回顧録等》

金大中(2018a) 『金大中 対話録 1 1971-1987』行動する良心。

(김대중(2018a) 『김대중 대화록 1 1971-1987』 행동하는 양심.)

金大中(2018b) 『金大中 対話録 2 1988-1993』行動する良心。

(김대중(2018b) 『김대중 대화록 2 1988-1993』 행동하는 양심.)

金大中(2018c) 『金大中 対話録 3 1994-2002』行動する良心。

(김대중(2018c) 『김대중 대화록 3 1994-2002』 행동하는 양심.)

金大中(2018d) 『金大中 対話録 4 2003-2007』行動する良心。

(김대중(2018d) 『김대중 대화록 4 2003-2007』 행동하는 양심.)

金大中(2018e) 『金大中 対話録 5 2007-2009』行動する良心。

(김대중(2018e) 『김대중 대화록 5 2007-2009』 행동하는 양심.)

- 金泳三(2000a) 『金泳三回顧録 1: 民主主義のための私の闘争』 栢山書堂。
(김영삼(2000a) 『김영삼 회고록 1: 민주주의를 위한 나의 투쟁』 백산서당.)
- 金泳三(2000b) 『金泳三回顧録 2: 民主主義のための私の闘争』 栢山書堂。
(김영삼(2000b) 『김영삼 회고록 2: 민주주의를 위한 나의 투쟁』 백산서당.)
- 金泳三(2000c) 『金泳三回顧録 3: 民主主義のための私の闘争』 栢山書堂。
(김영삼(2000c) 『김영삼 회고록 3: 민주주의를 위한 나의 투쟁』 백산서당.)
- 金泳三(2001a) 『金泳三大統領回顧録 (上)』 朝鮮日報。
(김영삼(2001b) 『김영삼 대통령 회고록 (상)』 조선일보.)
- 金泳三(2001b) 『金泳三大統領回顧録 (下)』 朝鮮日報。
(김영삼(2001b) 『김영삼 대통령 회고록 (하)』 조선일보.)
- 盧泰愚(2011a) 『盧泰愚回顧録 上卷 一国家、民主化、私の運命』 朝鮮ニュースプラス。
(노태우(2011a) 『노태우 회고록 상권 一국가 민주화 나의 운명』 조선뉴스프레스.)
- 盧泰愚(2011b) 『盧泰愚回顧録 下卷 一轉換期の大戦略』 朝鮮ニュースプラス。
(노태우(2011b) 『노태우 회고록 하권 一전환기의 대전략』 조선뉴스프레스.)
- 朴哲彦(2005a) 『正しい歴史のための証言 1 一5 共、6 共、3 金時代の政治秘事』 ランダムハウス中央。
(박철언(2005a) 『바른 역사를 위한 증언 1 一5 공, 6 공, 3 김시대의 정치 비사』 랜덤하우스중앙.)
- 朴哲彦(2005b) 『正しい歴史のための証言 2 一5 共、6 共、3 金時代の政治秘事』 ランダムハウス中央。
(박철언(2005b) 『바른 역사를 위한 증언 2 一5 공, 6 공, 3 김시대의 정치 비사』 랜덤하우스중앙.)
- 雲庭金鍾泌記念事業会(2015) 『雲庭 金鍾泌 一韓国現代史の証人 JP 画報集』 中央日報。
(운정김종필기념사업회(2015) 『운정 김종필 一한국 현대사의 증인 JP 화보집』 중앙일보.)
- 金大中(2000) 『金大中自伝 一わが人生、わが道』 千早書房。
- 金大中(2011a) 『金大中自伝 (I) 死刑囚から大統領へ 一民主化への道』 岩波書店。
- 金大中(2011b) 『金大中自伝 (II) 歴史を信じて 一平和統一への道』 岩波書店。
- 金泳三(2006) 『金泳三 (元大韓民国大統領) オーラルヒストリー』 中京大学。
- 金泳三(2008) 『金泳三 (元大韓民国大統領) オーラルヒストリー記録』 中京大学。
- 金鍾泌(2017) 『金鍾泌証言録』 新潮社。

《日本語一般文献》

浅羽祐樹(2010)

浅羽祐樹「韓国の大統領制 ―強い大統領と弱い政府の間」『アジアにおける大統領の比較政治学 ―憲法構造と政党政治からのアプローチ』ミネルヴァ書房、2010年、pp. 39-60。

浅羽祐樹、大西裕、春木育美(2010)

浅羽祐樹、大西裕、春木育美「韓国における選挙サイクル不一致の政党政治への影響」『レヴァイアサン』(47)、2010年、pp. 65-88。

出水薫(1998)

出水薫「韓国国政選挙における地域割拠現象再論 ―第15代大統領選挙を対象として」『政治研究』、1998年、pp. 61-85。

岡沢憲芙(1997)

岡沢憲芙『連合政治とは何か ―競合的協同の比較政治学』日本放送出版協会、1997年。

奥村牧人(2009)

奥村牧人「大韓民国の議会制度」『レファレンス』59(8)、2009年、pp. 97-125。

小倉紀蔵(2012)

小倉 紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣、2012年。

木宮正史(2003)

木宮正史『韓国 ―民主化と経済発展のダイナミズム』筑摩書房、2003年。

木宮正史(2012)

木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012年。

金浩鎮(1993)

金浩鎮著、李康雨訳『韓国政治の研究』三一書房、1993年。

金浩鎮(2007)

金浩鎮著、小針進、羅京洙訳『韓国歴代大統領とリーダーシップ』柘植書房新社、2007年。

木村幹(2008)

木村幹『韓国現代史 ―大統領たちの栄光と蹉跌』中央公論新社、2008年。

小谷豪治郎、金石野(1997)

小谷豪治郎、金石野『韓国危うし ―朴正熙と金鍾泌を再評価する』光文社、1997年。

五島隆夫(1990)

五島隆夫『盧泰愚政権を支配する慶北マフィア』アイベックプレス、1990年。

小針進(1998)

小針進「韓国の地域主義文化と金大中政権」『海外事情』46(10)、1998年、pp. 52-69。

小針進(1999)

小針進『韓国と韓国人―隣人たちのほんとうの話』平凡社、1999年。

小針進(2000)

小針進「韓国の地域主義と地域感情 一金大中政権の人事政策と第16代国会議員選挙を中心に」『東亜』(399)、2000年、pp.48-70。

小針進(2012)

小針進「韓国の政治」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣、2012年、pp.151-184。

小林慶二(1992)

小林慶二『金泳三 一韓国現代史とともに歩む』原書房、1992年。

孔義植、鄭俊坤(2008)

孔義植、鄭俊坤『韓国現代政治を読む』芦書房、2008年。

サルトーリ(2000)

ジョヴァンニ・サルトーリ著、岡沢憲芙、川野秀之訳『現代政党学 一政党システム論の分析枠組み』早稲田大学、2000年。

篠原一編(1984a)

篠原一編『連合政治Ⅰ』岩波書店、1984年。

篠原一編(1984b)

篠原一編『連合政治Ⅱ』岩波書店、1984年。

崔章集(2012)

崔章集著、磯崎典世、出水薫、金洪楹、浅羽祐樹、文京洙訳『民主化以後の韓国民主主義 一起源と危機』岩波書店、2012年。

池東旭(2002)

池東旭『韓国大統領列伝 一権力者の栄華と転落』中央公論新社、2002年。

池東旭(2004)

池東旭「ネガとポジのコリア・ルポ(87) 三金のラスト走者・金鍾泌」『世界週報』85(7)、2004年、pp.31-33。

デュベルジェ(1970)

モーリス・デュベルジェ著、岡野加穂留訳『政党社会学』潮出版社、1970年。

河信基(1990)

河信基『朝鮮が統一する日 一盧泰愚大統領の挑戦』日本評論社、1990年。

服部民夫(1992)

服部民夫『韓国 一ネットワークと政治文化』東京大学、1992年。

ハンチントン(1995)

サミュエル・P・ハンチントン著、坪郷実、中道寿一、藪野祐三訳『第三の波 一20世紀後半の民主化』三嶺書房、1995年。

ヘンダーソン(1997)

グレゴリー・ヘンダーソン著、鈴木沙雄、大塚喬重訳『朝鮮の政治社会 —朝鮮現代史を比較政治学的に初解明』サイマル出版会、1997年。

文京洙(2005)

文京洙『韓国現代史』岩波書店、2005年。

文京洙(2015)

文京洙『新・韓国現代史』岩波書店、2015年。

森康郎(2011)

森康郎『韓国政治・社会における地域主義』社会評論社、2011年。

森山茂徳(1998)

森山茂徳『韓国現代政治』東大出版会、1998年。

吉野孝(2001)

吉野孝「政党システム」川人貞史、平野浩、吉野孝、加藤淳子著『現代の政党と選挙』有斐閣、2001年、pp. 83-103。

レイプハルト(2005)

アレンド・レイプハルト著、粕谷祐子訳『民主主義対民主主義 —多数決型とコンセンサス型の36ヶ国比較研究』勁草書房、2005年。

レイプハルト(2014)

アレンド・レイプハルト著、粕谷祐子、菊池啓一訳『民主主義対民主主義 —多数決型とコンセンサス型の36ヶ国比較研究（原著第2版）』勁草書房、2014年。

渡辺重範(1992)

渡辺重範「政党と選挙制度」大西健夫編『ドイツの政治 —連邦制国家の構造と機能』早稲田大学、1992年、pp. 53-80。

《韓国語一般文献》

康元澤(2012)「3党合同と韓国政党政治」『韓国政党学会報』11(1)、pp. 171-193。

(강원택(2012)「3당 합당과 한국 정당 정치」『한국정당학회보』11(1), pp. 171-193.)

カン・フィギョン(2014)『忠北の選挙と地域アイデンティティ』忠北大学校。

(강희경(2014)『충북의 선거와 지역 정체성』충북대학교.)

金萬欽(1997)『韓国政治の再認識』ブルビッ。

(김만흠(1997)『한국정치의 재인식』폴빛.)

キム・メンニョン(2018)「白球百想 —金鍾泌元総理のゴルフ愛」『週間東亜』1145号(2018年7月4日)、東亜日報社、p.67。

(김명녕(2018)「白球百想 —김종필 전 총리의 골프 사랑」『주간동아』1145(2018.7.4), 동아일보사, p.67.)

- キム・ビョンムン(2012) 『彼らが韓国の大統領だ』ブック코리아。
(김병문(2012) 『그들이 한국의 대통령이다』 북코리아.)
- 金永雄(1985) 『雲庭 金鍾泌の昨日と今日』教音社。
(김영웅(1985) 『운정 김종필의 어제와 오늘』 교문사.)
- キム・ヨンチョル、チ・チュンナム、ユ・ギョンハ(2018) 『現代韓国政治の理解』マインドマップ。
(김용철, 지충남, 유경하(2018) 『그들이 한국의 대통령이다』 마인드맵.)
- 金容浩(2001) 『韓国政党政治の理解』ナナム。
(김용호(2001) 『한국정당정치 이해』 나남.)
- 金鍾泌(1971) 『J.P.コラム』瑞文堂。
(김종필(1971) 『J.P.칼럼』 서문당.)
- 金鍾泌(1980) 『新しい歴史の鼓動 —80年代のための私の設計』瑞文堂。
(김종필(1980) 『새 역사의 고동 —80년대를 위한 나 설계』 서문당.)
- 金鍾泌(2018) 『残っているあなたたちに —人生と苦悩、悟りそして92年の旅程から』スノー・フォックス・ブックス。
(김종필(2018) 『남아 있는 그대들에게 —삶과 고뇌, 깨달음 그리고 92년의 여정으로부터』 스노우폭스북스.)
- 共に民主党創党60年記念事業推進委員会(2016) 『共に民主党60年史 —国民と共に、民主60』靑い庭園。
(더불어민주당 창당 60년 기념사업추진위원회(2016) 『더불어민주당 60년사 국민과 함께, 민주60』 푸른정원.)
- 白和鍾(2002) 『喪主より悲しく慟哭する人の社説 —白和鍾の3金時代政治観戦記』ナナム。
(백화중(2002) 『상주보다 서러운 곡쟁이의 사설 —백화중의 3김시대 정치관전기』 나남.)
- 孫浩哲(1997) 『3金を越えて』靑い森。
(손호철(1997) 『3김을 넘어서』 푸른숲.)
- 沈之淵(2017) 『第3次増補版 韓国政党政治史 —危機と統合の政治』栢山書堂。
(심지연(2017) 『제3차 증보판 한국 정당 정치사 —위기와 통합의 정치』 백산서당.)
- 吳効鎭(1987) 『三金と盧泰愚』世宗出版。
(오효진(1987) 『三金과 노태우』 세종출판.)
- 雲庭金鍾泌記念事業会(2015) 『雲庭 金鍾泌 —韓国現代史の証人 JP 画報集』中央日報。
(운정김종필기념사업회(2015) 『운정 김종필 —한국 현대사의 증인 JP 화보집』 중앙일보.)
- 尹泳虎他(1998) 「政府部署十一大核心要職に湖南人事大浮上 —DJ 政権 45%、YS 政権 0%」『新東亜』464号 (1998年5月号)、東亜日報社、pp.138-167。
(윤영호등(1998) 「정부 부처 11대 핵심 요직 호남 인맥 대부상 —DJ 정권 45%, YS 정권 0%」 『新東亞』 464(1998.5), 東亞日報社, pp.124-179.)
- 尹正錫、申命淳、沈之淵編(1998) 『韓国政党政治論』法文社。
(尹正錫, 申命淳, 沈之淵編(1998) 『한국정당정치론』 법문사.)

- 李甲允(1998) 『韓国の選挙と地域主義』 オルム。
(이갑윤(1998) 『한국의 선거와 지역주의』 오름.)
- イ・ダルスン(2012) 『現代政治史と金鍾泌』 博英社。
(이달순(2012) 『현대정치사와 김종필』 박영사.)
- イ・ヨンホ(2005) 『変革的リーダーシップの観点からの歴代国務総理リーダーシップに関する比較研究 — 金鍾泌、李漢東、高建前総理を中心に』 修士論文 (漢陽大学校行政大学院)。
(이용호(2005) 『변혁적 리더십 관점에서 역대 국무총리 리더십에 관한 비교연구 — 김종필, 이한동, 고건 전총리를 중심으로』 석사논문 (한양대학교 행정대학원) .)
- 任懋伯(2011) 『1987年以後の韓国の民主主義 —3 金政治時代とその後』 高麗大学校。
(임효백(2011) 『1987년 이후의 한국 민주주의 —3 김 정치시대와 그 이후』 고려대학교.)
- チョ・ソンホ(2018) 『『最後の3金』金鍾泌去る』『月刊朝鮮』461号(2018年8月号)、朝鮮日報社、pp.276-285。
(조성호(2018) 「마지막 3金' 金鍾泌 지다」 『月刊朝鮮』 461(2018.8), 조선일보사, pp.276-285.)
- 韓国社会学会編(1990) 『韓国の地域主義と地域葛藤』 星苑社。
(한국사회학습편(1990) 『한국의 지역주의와 지역갈등』 성원사.)
- 咸成得(2016) 『第3版 大統領学』 ナナム。
(함성득(2016) 『제3판 대통령학』 나남.)
- 咸成得(2017) 『帝王的大統領の終焉 —韓国の大統領はなぜ失敗を繰り返すのか』 ソンエンソン。
(함성득(2017) 『제왕적 대통령의 종언 —한국의 대통령 왜 계속 실패하는가』 섬앤섬.)
- ファン・ソンウ(2015) 『花火 —現代史に風を追い立てた風雲児 金鍾泌一代記』 産学研総合センター。
(황선우(2015) 『불꽃 —현대사에 바람을 몰고온 풍운아 김종필 일대기』 산학연종합센터.)

《洋書一般文献》

- Axelrod, Robert(1970) *Conflict of Interest: A Theory of Divergent Goals with Applications to Politics*, Markham.
- Blondel, Jean(1968) "Party systems and patterns of government in Western democracies," *Canadian journal of political science*, 1, (2), pp. 180-203.
- Blondel, Jean(1978) *Political Parties: A Genuine Case for Discontent?*, Wildwood House.
- De Swaan, Abram(1973) *Coalition Theories and Cabinet Formations*, Elsevier Scientific.
- Elgie, Robert(2007) "What is semi-presidentialism and where is it found?," in Robert Elgie and Sophia Moestrup eds., *Semi-Presidentialism Outside Europe: A Comparative Study*, Routledge, pp. 1-13.
- Kang, Won-teak(2012) "A Fortuitous Democratic Consolidation?: Roles of Political Actors and Their Unintended Consequences in South Korea," Korean Political Science Association and Japanese Political Science Association eds., *Governmental Changes and Party Political Dynamics in Korea and Japan*, Bokutakusha, pp. 193-212.
- Kil, Soong Hoom and Chung-in Moon(2001) *Understanding Korean Politics: An Introduction*, SUNY.
- Kim, Youngmi(2014) *The Politics of Coalition in Korea*, Routledge.

- Leiserson, Michael(1970) "Coalition Government in Japan," in E.W. Kelley and Michael Leiserson eds., *The Study of Coalition Behavior: Theoretical Perspectives and Cases From Four Continents*, Holt, Rinehart and Winston, pp. 80-102.
- Riker, William H. (1962) *Theory of Political Coalitions*, Yale University Press.
- Shin, Doh C. (1999) *Mass Politics and Culture in Democratizing Korea*, Cambridge University.
- Shugart, Matthew Søberg(2005) "Semi-Presidentialism: Dual Executive and Mixed Authority Patterns," *French Politics*, 3, (3), pp. 323-51.
- Siaroff, Alan(2003) "Two-and-a-Half-Party Systems and the Comparative Role of the 'Half,'" *Party Politics*, 9, (3), pp. 267-290.